

進路たより

NO. 6

昨日はいよいよ最後の関門である公立高校入試の志願倍率が発表されました。進学校で倍率を割った学校もあれば、予想通り定員オーバーの学校もありました。ただ、悪い意味での予想外れはなかったと思います。大体この通りだろうと思うような結果でした。先週の集会では、「数字の惑わされるな！」というような話をしました。数字を見て、「これなら大丈夫だろう」とか「これじゃあ無理だ」とか、すぐに結果を推測してしまいがちですが、受検会場で問題を解くのは自分です。合格率よりも、自分の力を出し切る率を気にした方がよいです。どうしたら、受験当日に「出し切った！」という気持ちになれるのか？その点だけは、オリンピック選手も受検生も同じなんです。

追いつめられてこそ

みなさんは、ミレーという画家を知っていますか？「落ち穂拾い」や「晩鐘」などの作品で有名な画家です。このミレーの不遇時代のことです。

ミレーとその家族は、貧しさのため、飢えと寒さに震えていました。

そんな時、友人の画家ルソーが訪ねてきて、ミレーの作品を二百フランで買いたい男がいるのだが、売ってくれないか？と言うのです。

もちろん、買い手がいるというのほうそで、ルソーが友の苦しい生活をみかね、また、友人に心苦しい思いをさせてはならないと、「ある男」が買ったことにして、実は、ルソー自身が買おうとしたのでした。

後に、画家として成功したミレーは、この事実を知り、感激の涙を流したということです。偉大な画家でも、土壇場に追いつめられた時、自分ひとりの力では、とうてい成し遂げることはできなかったということです。



通勤の途中聞いていたラジオのある話題です。

出来事は埼玉県のある中学校の、とある3年生のクラスのことでした。

推薦入試を受けるA子さんにとって、いよいよ明日が受験となりました。不吉な知らせは、この時からあったのでしょうか、美術の時間に内ズックにたつぷりと絵の具を落としてしまいました。ズックの紐も、切れかかっていたので、どうせ家に帰って、明日の受験のために整えようと思っていた矢先です。授業中であつたのですが、担任の先生が入室してきて、A子さんをいつもかわいがっていた新潟のおじいちゃんが亡くなったという連絡をしました。

気もそぞろに、飛んで家に帰って、両親といっしょに新潟に向かったのです。

その夜、A子さんから担任の先生に電話が来ました。新潟にいるA子さんは、少々パニックになっているようです。

「先生、わたし、明日の受験にまっすぐ新潟から向かおうと思っていたのですが、内ズックを忘れてしまいました。どうしたらいいのでしょうか・・・。」

おじいちゃん不幸とも重なり、A子さんは、もうどうしたらよいのか、電話口には動揺の声が響きます。

「ズックぐらい忘れても大丈夫だよ。どうしてもというのなら、明日の朝、受験開始まで届けるから」と、担任の先生は励まします。

「先生、私のズック、汚れたままなのです。紐も切れかかっているし、一生に一度の受験なのに・・・。」
「ズックがなくても、受験校の先生に言えばスリッパ借りれるから。」と、先生は、A子さんを落ち着けようと一生懸命でした。

次の日。

できる限り、平静に受験させてあげようと、先生は、朝、真っ先に教室に向かいました。

すると、教室のストーブの前に、一足の真っ白な内ズックが置かれているのです。

「これ、どうしたの？」担任の先生は、近くにいた、女子生徒に尋ねます。

「先生、A子ちゃん今日、入試でしょ。昨日、帰る時、ズックが残っていたから、Yちゃんと右、左分担して、家で洗ってきてあげたの。今、ズック乾かしてるところ」

「ズックの紐は？」と、先生。

「紐はね、もう私立校で合格したRちゃんが、貸してあげるっていついたから、借りたよ。縁起いいでしょ。」

その後、先生は、急いで真っ白なズックを抱えて、高校を向かいました。

A子さんの受験の影には、こんな友人たちの心が重なり合っていたのです。

このわたしはというと、中学3年のこの時期になると、すぐAくんとBくんを思い出すのです。AくんとBくんは、親友ですが、違う高校を受験しました。同じ日に合格発表があり、Aくんは合格しましたが、Bくんは落ちました。その夜、Aくんは、Bくんに電話をかけようとしてためらいました。勇気がでなかったのです。

そうこうするうちに、Bくんから電話がかかってきたのです。

「Aくん、合格おめでとう。俺の方は、だめだったよ。」と・・・。

それに対して、Aくんはどう答えたかという、こう答えたのです。

「ごめん。おれ、電話しようとしてできなかった。勇気がなかったんだ。ごめんな。次の高校、がんばれよ。」と。

こんなやりとりがあったことを、Aくんのお母さんから聞いた私は、深く感動しました。

Bくんも偉いが、Aくんも偉い。二人の友情は、今でも続いています。

人は土壇場やピンチになると、どうしようもなく逃げたくなります。どうしようもなく、自分だけがだめだと思いたくなります。でも、ふと周りを見ると、自分だけでなく、一緒に支え合う友人が見えてくるのです。

ピンチになったときほど、本当の宝物が光り輝くんです。(わたしはそう信じています。)

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp